

## 「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

今回のテーマはカッツケ釣り用のウキ。1 m未満のタナがカッツケと定義されているが、カッツケ釣りにもハリスだけのタナで釣るハリスカッツケと呼ばれるものから、タナ 60～90 cm程度のセミカッツケと呼ばれるものまである。また、エサは両だんご、ウドンセット、トロ掛けセットと様々である。

浅ダナ釣り同様、カッツケ釣りもウキの機能が最も求められる釣りであり、タイプ別のウキの形状、素材構成などを紹介し、その機能を紹介。また、「フレアタリ」と「ウキが早く立つ」ことの意味を今一度理解していただきたいと思う。

### 第10章 カッツケ釣り編

#### 「尽心作」カッツケウキのバリエーション

関東・管理釣り場でのタナ規定は「第1オモリからウキゴムまで1 m以上」というものが多いが、関西ではタナ規定がない釣り場が多く、カッツケ釣りは一般的な釣り方だ。

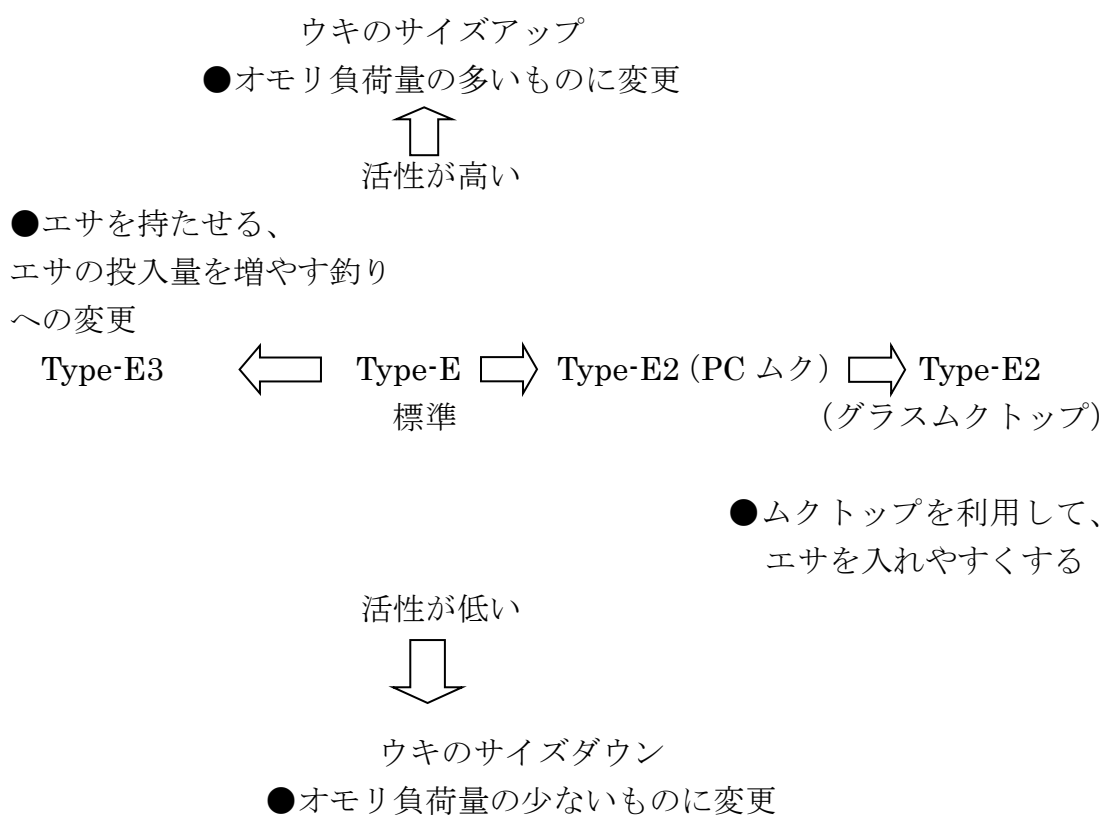
カッツケ釣り用のウキに求められる機能は①ウキの立ち始めが早い②ウキの立ち上がるスピードが早い③下向きに入るアタリだけでなく「フレアタリ」や「トメアタリ」など、様々なアタリを表現できる繊細さが求められる。

私が制作している「尽心作」のカッツケ釣り用ウキは「Type-E」（テーパー付きパイプトップ）を標準とし、ボディーの直径を変えてオモリ負荷量を変化させる「Type-E変」（テーパー付きパイプトップ）、「Type-E2」（ムクトップ）、「Type-E3」（ストレートパイプトップ）、の4タイプを揃えている。

考え方は、浅ダナウキと同じであり、イラスト1の「ウキチャート」に当てはめると、ご覧のようになる。

それでは、これら4つのウキはどのような状況のときに使い、形状・仕様の違いがどのような効果をもたらすのかを説明していこう。

## イラスト1 ●カッツケウキのチャート



### 各タイプのコンセプト

#### ●Type-E (標準型で両だんご、トロ掛けセット釣り用)

ボディはくさび型 (V字型) とし、重心をウキ上部にしてオモリが沈下中のときにウキを立たせ、なじみ途中でウケやサワリを出させる形状にしている。

トップは細パイプのテーパ付き。トップの体積が大きいため、エサを背負わせることができる。ただ、タナを凝縮するためにトップのストロークを少なくするので、長いトップは必要ない。長いトップだとトップのストロークが多くなり、より広い層を探ることになるからだ

足はなじみ込みの良いカーボン製とし、長さは足長ウキの標準といわれる 60 mm よりも 10 mm 短い 50 mm としている。それは下に入るアタリだけでなく、横に動く「フレアタリ」も表現する必要があるからだ (○ページのイラスト 2 参照)。

#### ●Type-E変 (両だんご、トロ掛けセット釣り用)

Type-Eの仕様を基本として、ボディの長さは40mmを標準とし、直径を5・0mm、5・5mm、6・0mmと変えることにより、オモリ負荷量を変化させている。これはウキを交換しても、トップのストロークが変わらないので、釣り人の違和感を軽減させることができるためである。

●**Type-E2**（高活性時の両だんご釣り用）

カツケ釣りにおいて、ヘラブナが背ビレを出して湧き上がるような状況のとき、ムクトップの比重を利用してウキをなじませることがある。これはそういうときに向いており、トップはPCムクとグラスムクの2種類ある。Type-Eでウキがなじまない場合はType-E2のPCムク、それでもなじまない場合には、グラスムクを使用する。

●**Type-E3**（セット釣り用）

顆粒ペレットを含んだ比重の重いバラケエサをしっかりとなじませ、タナをつくって釣り込む釣りに使用する。ボディはくさび型とし、重心をウキ上部にしてオモリが沈下中のときにウキを立たせ、なじみ途中でウケやサワリが出やすい形状にしている。

テーパなしの細ストレートトップを採用し、先端部分もトップの径が同じであることから、なじみ幅の調整がしやすいようにしている。

トップがストレートのため、水面上に出るトップのどの部分も同じ体積になるため、なじみ切る速度が一定となり、テーパ付きトップの先端近くまで来たときに、スッと沈んでしまうような感覚を排除している。また、タナを凝縮するために、あまり長いトップは必要ない。

足はなじみ込みの良いカーボン製とし、長さは足長ウキの標準といわれる60mmよりも10mm短い50mmとしている。



### Type-E (標準)

トップはテーパー付きの細パイプトップで2枚合わせ羽根ボディ、カーボン足。両だんご、トロ掛けセット釣り用カツケウキ。1mのタナを釣るタイプよりも足が短く、肩の絞りを急テーパーにすることで、ウキの立ち始め、立ち上がるスピードを早くしている



### Type-E変

仕様はType-Eと同じで、ボディ直径を変えることによりオモリ負荷量を変え、ウキを交換しても、トップのストロークが変わらないので、釣り人の違和感を軽減させることができる。



### Type-E2

Type-Eをベースにして、トップをPCムクもしくはグラスムクに変更したもの。高活性時における両だんごのカツツケ釣り用で、比重があるムクトップにより、ヘラブナが湧き上がる状態でもウキをなじませることができる。また、ムクトップには浮力がないため、ヘラブナがエサを吸い込んだときの違和感を減らすことができ、場合によってはカラツンを減少させることができる



### Type-E3

Type-Eをベースに、トップをテーパーのないストレートパイプトップに変更したもの。ウドンのセット釣り用カッツケウキで、ストレートパイプトップにより、顆粒ペレットを含んだ比重の重いバラケエサを支えることができる。また、テーパーがついていないため、テーパー付きトップの先端近くまで来たときに、スッと沈んでしまうような感覚を排除している

## 使い方

### ●Type-E・Type-E変・Type-E2

エサ落ち目盛りの設定は、上下のハリを付けた状態で全7目盛りの場合、トップ先端から3目盛り出し、もしくは2目盛り出した所。全6目盛りの場合もトップ先端から3目盛り、もしくは2目盛り出し所を基準とする。

エサ落ち目盛りをトップ先端近くで決めれば、ウキの余浮力が減少し、トップのなじみ込みが良くなるからだ。

もし、ウキのなじみが悪いと感じれば、エサ落ち目盛りをさらにトップ上部に変更し、ウキの余浮力をさらに減らしてウキをなじませやすくする。

### ●Type-E3

エサ落ち目盛りの設定は、クワセエサのウドンを付けた状態でトップ先端から3目盛り、もしくは4目盛り出した所を基準とし、3目盛り、もしくは4目盛りの間でバラケエサを調整する。

同じバラケエサを同じように使ってトップが沈没するようになれば、バラケエサが経時変化して開きが悪くなった、もしくはヘラブナの寄りが少なくなったと想像できる。逆になじみ幅が出ない場合には、上ずり傾向にある、と状況を見極めることができる。

表-1 尽心作でのカッツケウキの仕様比較

	Type-E、E変	Type-E2	Type-E3
ボディ	クジャクの羽根2枚合わせ：5.8mm径	クジャクの羽根2枚合わせ：5.8mm径	クジャクの羽根2枚合わせ：5.8mm径
足	カーボンで長さは50mm	カーボンで長さは50mm	カーボンで長さは50mm
トップ	テーパー付き細パイプ	PCムク、もしくはグラスムク（根元径1.0mm→先	ストレートの細パイプトップを採用。トップをスト

		端0.6mm)を採用。Type-Eでなじまない場合はType-E2のPCムクトップ、それでも入らない場合にはグラスムクトップを使用する	レートにすることで、なじみ幅の調整をしやすいようにしている。また、なじむ速度が一定になり、テーパー付きトップ特有の先端近くまできたときスッと沈んでしまうような感覚を排除している
ウキが立ち上がる位置	肩がやや出たところ	肩がやや出たところ	肩がやや出たところ
トップの長さ	短い	短い	短い
ボディー形状	いかり肩（急テーパー）で重心をウキ上部にすることでウキの立ち始めるタイミングと立ち上がる早さが早くなり、ウキが立ち上がった後にウケが出やすい	いかり肩（急テーパー）で重心をウキ上部にすることでウキの立ち始めるタイミングと立ち上がる早さが早くなり、ウキが立ち上がった後にウケが出やすい	いかり肩（急テーパー）で重心をウキ上部にすることでウキの立ち始めるタイミングと立ち上がる早さが早くなり、ウキが立ち上がった後にウケが出やすい

### 「フレアタリ」が出る原理

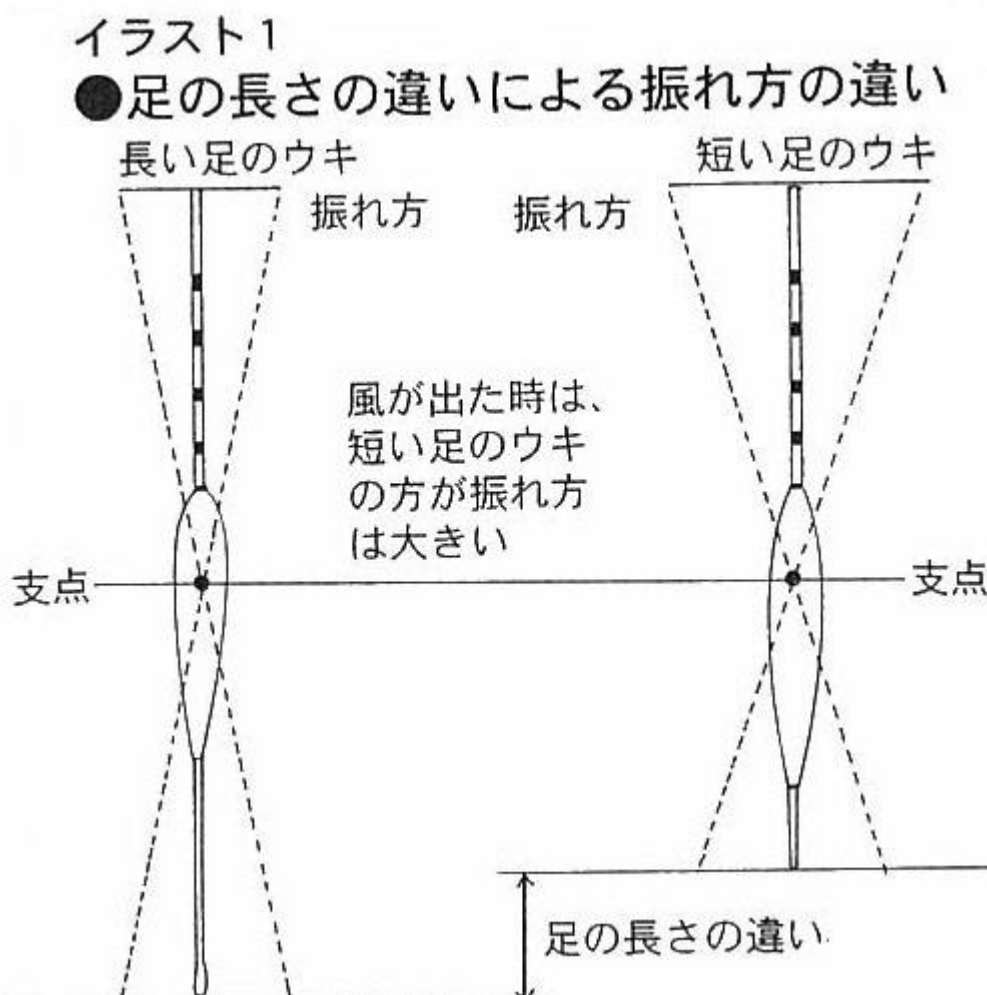
タナ1～2mほどの浅ダナ釣り用のウキには、立ち上がりを速くすること以外に「座りの良さ」と呼ばれる、風や流れに対する安定性が求められる。

そうするためには「ウキの浮力の支点から、テコの原理の力点」（イラストでは足の先端）までの距離を長くして、風や流れの力が加わった際、ブレ（揺れ）にくい構造にする。

流れにより、水面下のボディーに風や流れの力が加わっても、またはトップに風の力が加わっても、いずれもブレは足長タイプのほうが少ない（イラスト2参照）。イメージとしては、土の中に杭を打つことを想像してみてください。土の中に長く刺した杭は安定し、短く刺した杭は少しの外力で倒れてしまう。

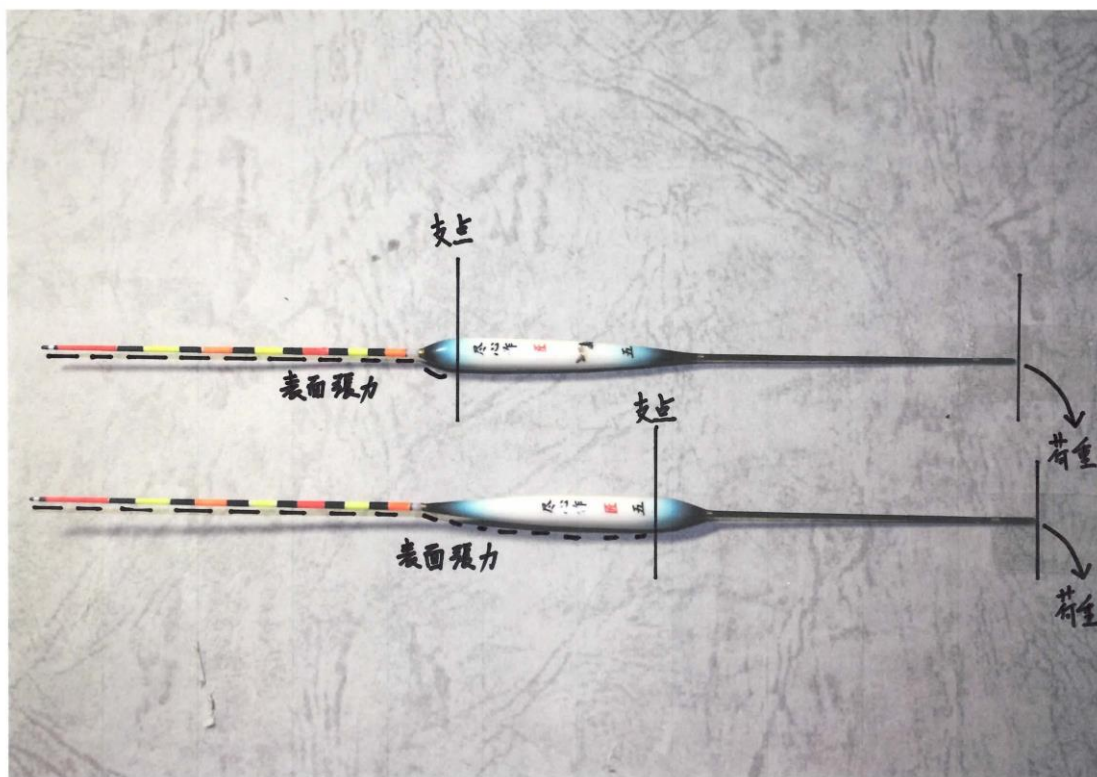
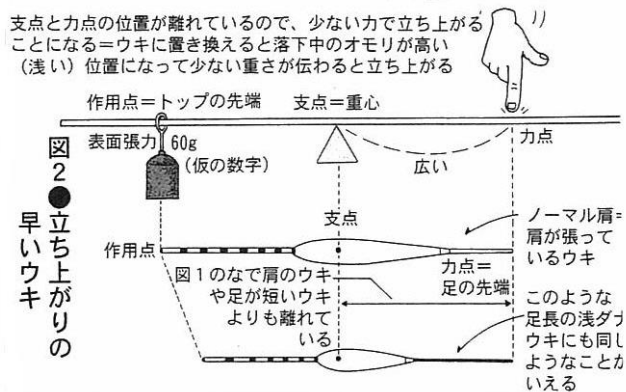
一方、カッツケ釣り用のウキでは逆の対応、つまり、「ウキの浮力の支点からテコの原理の力点までの距離を短く」して、鉛直下向きに入るアタリだけでなく、フレアタリやトメアタリなど、様々なアタリが出るようにしている。また、カッツケ釣りのタナは1 m未満であることから、ウキの浮力の支点からテコの原理の力点までの距離を長くして、少ない力でウキを立ち上げるといった必要がないため、長い足は必要ない。

このように、「足の長さの違いによるウキの立ち上がり」については様々な関係があり一言では言い尽くせないことから、改めて章立てして解説していきたい。



(参考図：力点を明示するため、下記の図は掲載不要)





## 言葉の統一

「ウキが早く立つ」と「ウキの絞りがきつい」という言葉に対して、違う意味でとられている場合があるので、概念の統一が必要だと感じている。

### ①「ウキが早く立つ」

雑誌やブログなどで「ウキが早く立つ」という言葉が使われている。これには2つの意味があるが、まとめて「ウキが早く立つ」という言葉で表現していることから、具体性に欠けると思う。

私の考えは次の通りである。

●概念1＝オモリが高い位置(沈下中の早い段階)のときにウキが立ち始め、オモリが沈下するに従い、ウキが直立する。この場合、ウキが立ち上がり始めてから、ウキが直立するまでは遅い。

こういうウキは浅ダナ釣り用でボディが小さく、足が長いタイプである。このタイプは主にヘラブナの活性が低いときに向いていて、エサをゆっくり沈下させてアピールできる。そして、なじみ切るまでに時間をかけてヘラブナの反応を探ることができるイメージとなる。

●概念2＝ウキが立ち始めてから直立するまでが早い。これは「ウキがシャキと立つ」と言われるタイプだ。

これも浅ダナ用で、足が短くオモリを背負うウキである。このタイプはヘラブナの活性が高く、できるだけ早くエサをタナに沈下させるときに有効。

このように、2つの違った概念を混同して「ウキが早く立つ」と表現すると、意味がややこしくなってしまう。

私見では「ウキが早く立つ」ではなく、概念1は「ウキが立ち始めるのが早い」、概念2は「ウキの立ち上がるスピードが早い」と使い分けるべきと考えている。

## ②「ウキの絞りがきつい」

「ウキのボディ下の絞りがきついのとゆるいのでは、どのような違いがあるのか？」という質問を受けた。

ウキ製作者である私は「ウキの絞りがきつい」というのは、「ボディの上部から足の付け根までのテーパーが長くて流線型」(流線型＝先端が丸くて全体が細長く、後端が尖っている形。魚の体型がこの形のイメージ)と理解してしまった。

しかしながら、質問者の意図は「ウキの絞りがきつい＝テーパーが急なもの」であった。

これは言葉の意味を製作者側、使用者側のどちらでとらえるかによって、理解が異なってしまったケースだと思う。

このあたりも、ヘラブナ釣りの説明を難しくしている所以であると感じた。